14. ウネダ・ミゾオシ

冠水した湿地は深すぎては田にならない。そこで水面下に畝を作ってその畝に稲を植えるウネダがみられた。田にならない湿地まで田にする執念の工夫である。

◆ウネダ

〈A〉はウネダの断面図。ウネ幅 50cm、タニ幅は 50 ㎝とも、ウネ幅 60cm、タニ幅 40cm とも聞いた（鳥飼中）。2～3 尺（60～90cm）の通路をあけて 5 寸（15cm）の高さにウネを盛る（別府）。田植え前にはウネコミといって、ウネを手で押さえた（鳥飼中）。

〈B〉はウネダの面影を残す鳥飼下の水田。別府や鳥飼下にウネダがあった。鳥飼中でも深い田はウネダにした。鳥飼八防でも戦時中に排水工事をするまではウネダだった。

◆牛でウネを盛る

ウネダはカラスキで片側 3 カラでウネに盛る。牛はゴボー、ゴボーと足を抜いて進んだ。カラスキはよっぽど手を決めてないと上がってしまう（鳥飼下）。床の長いカラスキでないとうまくいかない（鳥飼中）。

◆ウネダの田植え

ウネには苗を 3 本植えた。5 本植えもあった。ウネの上は密植なので、ウネダにしない場合と総本数はあまりかわらなかった。苗を伸ばしてから植える人もあった（別府）。

田植えは普通後ろに下がりながら植えるが、ウネダでは前進して植えた。ミゾを進んで右のウネを植えていき、方向転換して帰りにも右側を植えてミゾの両側を植え終わる。この往復の苗数を見計らって腰に縄をつけて普通 5～6 把、多いときは 10 把を連結してヒコズッテ（引きずって）いく。縄の後端の苗だけ括ってその間に苗を掛けて引いていくわけである。「ウネダは大きかった」という言葉には実感がこもる（鳥飼中）。

◆ウネダの草取り

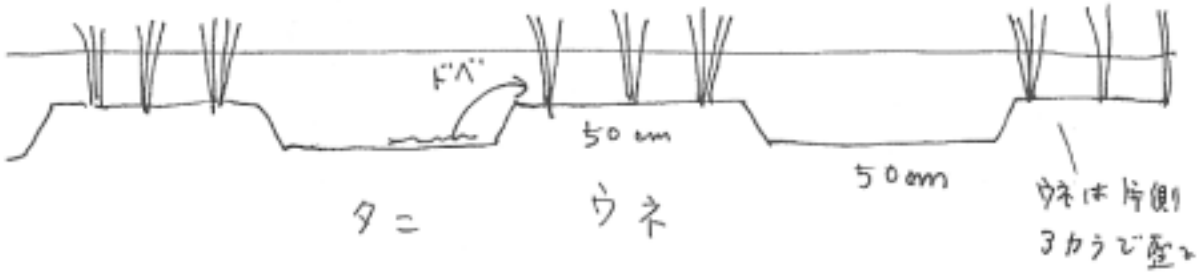
ウネダでは一番草・二番草・三番草とも手で掻き、アゲグサはビンズラカキといって畝の両側を手で掻いた（鳥飼中）。ビンズラとはミヅラ（角髪）のことで古い言葉。

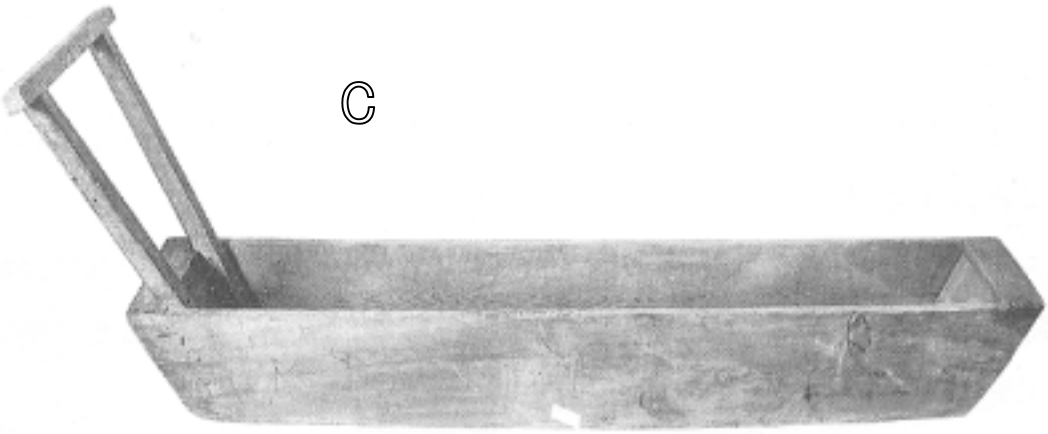
7～8 月にはウネモリといってタニのドベをウネにあげた。「ウネダを 6 反も作ったら夏の暑いのにえろうてなぁ」（鳥飼中）。

◆ミゾオシ（溝押し）・タニオシ（谷押し）

〈C〉はミゾオシで、ウネダの溝幅に合わせた手押し舟。長さ 174cm、幅 34cm、深さ 29cm、把手の高さ 77cm。タンゴでイノテ（担って）きたコエ（肥）を舟にあけ、ミゾをバックしながら杓で肥を撒いた（鳥飼下）。タニオシに稲を 10 束積んで押した（鳥飼中）。

A



B

C